

氏名	西 田 小百合		
授与した学位	博 士		
専攻分野の名称	経 済 学		
学位授与番号	博甲第2180号		
学位授与の日付	平成13年 3月25日		
学位授与の要件	文化科学研究科産業社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)		
学位論文題目	ビジネス・サーベイ・データの非定常性の検討と景気予想の合理性		
論文審査委員	教授 藤本 喬雄	教授 中村 良平	教授 長畑 秀和
	助教授 紙屋 英彦		
	広島大学経済部教授 前川 功一		
	広島修道大学経済科学部教授 藤本利躬		

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の研究テーマは、合理的期待理論に準拠しつつ、企業の予想の正確さについて計量的に仮説検定を行うことである。実際に用いられるデータは、ビジネス・サーベイというある程度主観的な判断を含む調査から得られたものである。すなわち、景気状況、売上高、需要量、供給量、投資額などについて、各企業の予想値、期待値、実績値を定期的に調べる調査である。その中の定性的なデータは、適切な方法で数量化されている。このような時系列における定常性をまず検定し、その結果に基づいて合理性の検定方法を選択し実行しようとするものである。本論文は5個の章から構成されている。

序章で、研究目的を述べた後、第2章においてデータの季節性について詳しく分析している。季節性の理論と、その検定理論、また、和分の次数に関する検定理論とその分析結果について紹介・報告がなされている。この作業は時系列データの非定常性を検定するもので、第4章での合理性検定において、どの検定方法が適用可能か見いだすために行われている。まず、季節性が *deterministic* か *stochastic* かを検定する Osborn の方法が紹介され、次いで四半期データの和分次数に関する検定法が、和分 $I(1,1)$ 、 $I(0,1)$ の順序で説明されている。和分次数 $I(1,1)$ の検定においては、2個の単位根検定方法が使用されている。各種の検定方法の結果が異なる場合、追加的な情報で総合的に判断が行われている。著者が第4章で用いるデータに対して行った検定結果では、季節性は *deterministic* なものが多い、ということ、定常性を有する系列が多いという2点が目立っている。和文 $I(1,1)$ に分類されるものは、1個の実績系列のみであった。よって、普通の季節調整プログラムを施すと差分過剰の処理になることが示されている。

第3章では、予測の合理性の検定方法が、2個の場合に分けて説明されている。データ系列が定常な場合と非定常な場合である。合理性の検定に使われる、不偏性の検定と有効性の検定についてその手続きを解説している。不偏性は、文字通りバイアスがあるかないかの検定であり、有効性検定は予想形成時に、利用可能な情報を適切に組み入れているかどうかをみるものである。実際においては、2個の連立方程式回帰モデルの係数が一致し

ているとみなせるかどうかで判定する。有効性については、直交性検定も説明されている。以上の定常な場合と比較して、非定常の場合に必要な検定上の修正が章末で説明されている。

第4章において、著者が今回実際に行った2種類のデータ群についての検定結果をまとめている。2個のデータ群は、岡山経済研究所の「東瀬戸圏企業経営動向調査」（1980年第4四半期から1996年第4四半期まで）と、大蔵省「景気予測調査」（1983年第2四半期から1996年第4四半期まで）から得られるものである。それによれば、実績値系列と期待系列が定常性を持っているデータについての合理性検定では、予想の合理性が棄却されるものが多い。合理性の仮説が棄却できなかったものは、5個の系列のみであった。その例外の中でも目立っているものは、1期先予想に関して、東瀬戸圏BSIにおける輸送用機械部門の業況判断の系列である。

終章では、今回の研究で、なぜ合理性が棄却されたかについて、著者の考えを示している。特に、情報集合という概念の難しさについて述べている。そして最後に、'ヒゲ'グラフというものにおける特徴として、著者が使用したデータにおいては、従来言われていた「保守的な予想」と異なり、「強気の予想」が見られたことが付言されている。1961年の馬場の結論を支持しているということである。

論文審査結果の要旨

学位審査会は、2001年1月29日、学内審査員4名、招聘審査委員2名によって行った。審査結果は以下の通りである。

1. 本論文の評価すべき点

(1) 従来の地域経済分析に使用される統計的手法は、比率、成長率、対全国比などのようなプリミティブなものに限られることが多かったが、本論文は和分・共和分分析のように最新の計量経済学的分析が用いられており、伝統的水準からの飛躍は高く評価できる。また、近年の理論研究についてもよく調べている。

(2) 分析手法が用意周到である。すなわち、データ系列の定常性をまず判別してから、合理性検定の方法を使い分ける、という慎重な方法を用いたことは、評価できる。上記(1)と合わせて、我が国の地域経済研究を学界標準を満たす計量経済学的分析に高めたといえる。

(3) 統計的手法の応用とその順序は適切であり、今後の地域データを使用した企業行動の合理性判定手続きの一典型となりうる、と判断できる。

(4) 複雑な手続きを、細心の注意をもって遂行している。作業の量は、個人研究では限界的な多さであろう。煩雑な式が多数あるにも拘わらずミスは極めて少ない。

2. 本論文の若干の問題点

(1) 既存の関連文献をもっと探索すべきであった。また、最近の地域経済研究の動向を知る上でも、学会発表を通じて情報収集に努力し、その成果を取り入れるべきであった。

(2) 用いられた統計手法の説明をもっと詳しくすべきである。検定結果についても、材料が豊富なことから、もっと大いに書くべきであった。

(3) 合理性仮説が棄却されたことを、客観的に受け止めストレートに表現すべきである。結果を懐疑するような書き方は避けなければいけない。他の多くの研究でも棄却されているし、経済理論的にも説明可能な部分もある。

(4) 簡単なものであっても、著者自身の工夫による統計的表現、合理性の検定方法が1個でもあれば、論文のオリジナリティは更に高まった。

3. 総合評価

上記の若干の問題点に拘わらず、総合的に評価すれば、本論文は執筆者に「経済学」の分野名を付記した博士の学位を授与するのに十分な内容と水準を有していることを認定する。